

里見弴「かね」論 — 貨幣蒐集と欲望 —

瀧田 浩

一、動機なき行動者の時空

— イニシャルの場所・半現実の時間 —

里見弴の「かね」は、谷口他吉の一代記のスタイルで書かれた虚構小説である。この一代記は内面よりも、金の持ち逃げや窃盗などの行動を中心に書かれている。行動中心の一代記というスタイルは、里見の意図にもとづいたものだ。以下に引用する『里見弴全集 第七巻』「あとがき」を読むと、動機なき行動者の造型が、この小説を綴る大きな目的であったようにみえる。

永年有島生馬家で、忠僕と噂されながら勤めてゐた爺やが、銀行へ預け入れの、さう大した額たかでもない金を持つて出たまゝ永遠に消息を絶つてしまった。その失はれた後半生に、こまごまとした空想の象嵌をほどこしたくなるのは、作家根性といふやつも、ものずきと言はうか、おせつかひと言はうか、ともかく尋常一様ではない。まづ出生地を、当時まだ行つたこともなかつた四国の松山と定め、銀行の裏手にこびりついてゐるやうな小使部屋に住む鰥おとこやもめで、吝嗇おこづめんぼの

親爺と二人きりの、陰気な日々をすごしてゐる少年を主人公に撰んだ。原因とか理由とか呼ぶべき何もない拐帯もちつけのあとは、連絡船で釜山に渡り、大連近郊なる星ヶ浦に下僕として住み込み、帰国後は芦屋、名古屋、東京、新潟、三朝と、私としての曾遊の地であらうがなからうが勝手次第に飛び廻らせて、遂に米子の寺長屋で、六十六歳の生を終る前には、落葉にまぜく、永年もち歩いた檻樓くづを焼き尽すといふ、毒にも薬にもならぬ空想遊びの楽しさ（略）。

松山・星ヶ浦・芦屋・名古屋・東京・新潟で六回繰り返される、「原因とか理由とか呼ぶべき何もない」犯罪。これが物語の中心をなしている。「空想」という言葉が二度使われていることからわかるとおり、「かね」は、身近な人間の行動をきっかけに構想されたフィクションである。物語の縦糸は朝鮮半島や中国大陸まで「飛び廻」る他吉の移動であり、横糸は貨幣をめぐる犯罪であるといえよう。まず、他吉の生涯を織り上げる縦糸と横糸を、年齢順に整理して確認しておきたい。

他吉が移動する場所については説明が必要である。「あとがき」では、地名はすべて固有名詞で表記されているが、初出の『改造』版（一稿とする）においては、ほとんどすべてがイニシャル表記であった。そのイニシャル表記が、『アマカラ世界』版（二稿とする）、『かね』版（三稿とする）と、少しずつ固有名詞に改められている。他吉の移動と貨幣をめぐる犯罪の整理とともに、地名表記の異同も示しておく。

誕生ⅡM（改稿なし。全集「あとがき」で、松山とわかる）にある銀行横の家に生まれ、父と暮らす。父によれば、母は他吉を生んだ時に亡くなった。

一五歳ⅡO市（↓大阪。二稿で改稿）の下駄屋で丁稚奉公。

二一歳ⅡT（↓善通寺。三稿で改稿）の連隊に入隊。

二四歳ⅡM（改稿なし）に戻り、下駄屋に奉公。

三〇歳ⅡT（改稿なし）の下駄屋に奉公。

三八歳ⅡM（改稿なし）に帰郷し、銀行の小使いという父の仕事を継ぎ、三年後に父を看取る。臨終前の父から、七二四〇円三二銭の遺産と「ひとが吃驚するやうな大仕事を仕出かしてみろ」の遺言を受け取る。

五三歳Ⅱ銀行の金一万円を持ち逃げし（父の遺産は置き去りにする）、Y（改稿なし）からS（↓下関。二稿で改稿）を経て、F（↓釜山。三稿で改稿）へ行き、料理屋で洗方兼出前持ちをする（「緒方平吉」と変名を使う）。その後、K（↓京城。三稿で改稿）で、手に入れた金を入れるための手文庫を買い、D（↓大連。三稿で改稿）近くのH（↓星ヶ浦。三稿で改稿）へ行き、M（↓南満州。三稿で改稿）鉄道会社理事の家の下男になる。

五六歳Ⅱ下男をしていた家の金千円を持ち逃げし、O市（↓大阪。二稿で改稿）に戻った後、A（↓芹屋。三稿で改稿）の洋画家の家で働く（「山本常造」と変名を使う）。

年末Ⅱ洋画家の家の金二五〇円を持ち逃げし、N（↓名古屋。二稿で変更）へ行き、ある町家に住み込みで働く。

五七歳Ⅱその家の定期預金証書を盗み、T（↓東京。二稿で改稿）へ行き、しばらく見物した後、九月から麻布（改稿なし）の華族邸に住み込みで働く。

五八歳Ⅱ関東大震災で華族の主人から預かった、安否がわからない愛人あての金三百円を持ち逃げ、N（↓新潟。二稿で改稿）へ行き、校長の家に住み込みで働く。三年後に校長の計らいで、学校の住み込み小使いになる（「平太郎」の変名を使う）。

六五歳Ⅱ教職員給与用の金七二五〇円を学校の金庫から盗み、M（↓三朝。二稿で改稿）温泉に行く（宿帳に「菊池年明」と書く）。そこで絵を描いていた住職と知り合い、住職の寺のあるY（↓米子。二稿で改稿）へ行く。

六六歳Ⅱ死去。他吉が遺したお金の総額は、二〇三五〇円。

変更の傾向をまとめておこう。『改造』の一稿では、小説世界はイニシャルの世界＝匿名の世界だったが、『アマカラ世界』の二稿では、戦前におけるいわゆる内地の主要な都市が固有名詞で表されるようになった（「O市」↓「大阪」、「T」↓「東京」、「N」↓「名古屋」、「N」↓「新潟」、「Y」↓「米子」など）。『かね』発行は一九四八（昭和二三）年二月だから、二稿から三稿のあいだで戦争が終わっているが、この三稿において、いわゆる内地以外の場所や組織名も固有名詞化され、また他の場所もふくめ作品中の場所のほぼ全てが固有名詞で表現されるようになった（「T」↓「善通寺」、「K」↓「高知」、「S銀行」↓「住友銀行」、「F」↓「釜山」、「K」↓「京城」、「D」↓「大連」、「M鉄道会社」↓「南満州鉄道会社」、「H」↓「星ヶ浦」など）。例外は他吉の生地「M」ほか、ごくわずかである。

イニシャルで匿名化された地名と合わせて考えておくべきなのが、他吉の変名である。他吉は犯罪をおかすたびに移動を繰り返し、その都度、本文で示されているものだけでも、「緒方平吉」「山本常造」「平太郎」「菊池年明」と四度名前を変えている^③。「かね」の一稿は、匿名化された場所の頻繁な移動と、移動のたびに繰り返される名前の変更とによって、仮想性を強く帯びた物語であったことを確認しておこう。改稿が進むにつれ仮想性は薄れ、現実世界の固有性を回復していくが、最後までイニシャル表記のままであった生地「M」は、一稿に濃厚であった仮想性の痕跡といえる。いずれにしろ、作品は全体として、固有名で示される場所で日常性に身を浸しながらも、対人的なコミュニケーションの深化には留保をほどこし、犯罪のたびに次の場所へと大きく移動する小説に変わっていった。

「かね」では、他吉の誕生から六十六歳で亡くなるまでが書かれているのだが、小説内の時間を史実に対応させて読むことがある程度は可能である。三章で関東大震災（一九二三「大正一二」年）が描かれているが、本文中の情報から、この時他吉は五十八歳だとわかる。これにもとづき生没年を計算すれば、他吉は一八六六（慶応二）年生まれで（数え年として計算）、一九三二（昭和六）年に亡くなったことになる。想定される他吉の生きた時代はほぼこのようになるが、この虚構小説は歴史的事実と完全に足並みをそろえているわけではない。関東大震災以外に歴史的事実と考えられる物語中の出来事と

しては、M（松山）の市制移行と、住友銀行M（松山）支店開業がある。小説ではM（松山）の市制移行時、他吉はすでに五十三歳とされているから、五十八歳の時に一九二三（大正一二）年だったことをもとに五年引き算をすれば、M（松山）の市制移行は一九一八（大正七）年になるはずだが、史実として松山が市制に移行したのは一八八九（明治二二）年一二月であり、二十九年の誤差が生じる。また、住友銀行に松山支店は存在したことはない⁴。現実の時間と交錯する「かね」の間もまた、作品に仮想的な印象をあたえる一助となっている。

二、「小僧の神様」をめぐる

— Aと「作者」の純粹贈与 —

さて、本稿の目的は、貨幣にたいする奇妙な執着を描いた、里見弴の小説「かね」を読み解くことであるが、私が「かね」を論じる動機は、一つの小説と一つの評論によってあたえられている。志賀直哉の「小僧の神様」と中沢新一『愛と経済のロゴス カイエ・ソバージュⅢ』⁶である。私が「小僧の神様」を読むたびにどこかしく感じていた、自分の読みだけでは到達しきれない作品の深層について、中沢は問題の焦点を指摘し、読み解く指標を提示してくれた。中沢が「小僧の神様」に含まれた謎を読み解いたように、「かね」に含まれた謎を読み解きたいというのが、今回の論考の出発点である。志賀と里見はともに『白樺』同人であるが、一般に白樺派の可能性あるいは問題点と概括されるもの、あるいは志賀・里見の個性の問題として一般的に把握されるものとは異なる問題を、「小僧の神様」と「かね」は提供している。それはともに、貨幣という媒介を通じた行為によって浮き彫りにされる、人間と人間との関係のあり方である。

「かね」を論じる前に、「小僧の神様」の問題のありかを確認しておこう。善良な貴族院議員Aは、ひよんなことで知った小僧仙吉に（ご馳走するAの存在を感じさせることなく）鮓をご馳走することに成功する（仙吉をして、Aを「神様」か

「仙人」か「お稻荷様」かもしれないと思わせるほどに)。しかし、もくろみをスマートに実現したにもかかわらず、そこにひそむ偽善性にAは悩まされてしまう。Aの悩みは以下のようなものである。

Aは変に淋しい気がした。自分は先の日小僧の気の毒な様子を見て、心から同情した。そして、出来る事なら、かうもしてやりたいと考へて居た事を今日は偶然の機会から遂行出来たのである。小僧も満足し、自分も満足していい筈だ。人を喜ばす事は悪い事ではない。自分は当然、或喜びを感じていいわけだ。所が、どうだらう、此変に淋しい、いやな気持は。何故だらう。何から来るのだらう。丁度それは人知れず悪い事をした後の気持に似通つて居る。

若しかしたら、自分のした事が善事だと云ふ変な意識があつて、それを本統の心から批判され、裏切られ、嘲られて居るのが、かうした淋しい感じで感ぜられるのかしら？ もう少し仕た事を小さく、気楽に考へてゐれば何でもないのかも知れない。自分は知らず／＼こだはつて居るのだ。然し兎に角恥づべき事を行つたといふのではない。少なくとも不快な感じで残らなくてもよきさうなものだ、と彼は考へた^②(七章)。

みずからの行為を、心細やかに配慮した無私なほどこしと信じようとしても信じられず、どうしても偽善の意識がわきあがり、むしろ罪悪感に満たされてしまうのが、Aの内面である。仙吉の内面に寄りそつた語り(一・二章、六章、八章、十章)と、Aの内面に寄りそつた語り(三・四・五章、七章、九章)が交互に繰り返される「小僧の神様」において、読者は二人の内面を見うる場に立つが、読者のうち多くの大人は、無垢な感謝の念にみちた仙吉の内面と対照的な、Aのわだかまる内面の方を共有するだらう。物語の中で第三者として登場するAの妻と鮎屋のかみさんは、Aの行為につゆほども偽善のにおいを嗅ぎとつてはいないし、むしろ仙吉の喜びを当然のように想像しているから、Aの偽善意識や罪悪感、Aの過剰な自意識にもとづくものだと考へるべきかもしれない。しかし、自意識過剰に還元することでは収まらない、もつと大それ

た何かをAがしでかしてしまつたという印象を、私は容易にぬぐい去れないのだ。

中沢新一は単なる自意識の問題とは考えなかつた。彼は、モノを媒介にした人と人の関係の三つの様式（Ⅱ「交換」「贈与」「純粹贈与」）をもとに、分析をおこなつてゐる。彼は「小僧の神様」について、以下のように述べる。

この小説は単純なようであり、とても深遠な内容をもつてゐます。とりわけここには、近代社会の中でおこなわれる「贈与」の難しさ、不可能性などが、さらりとした筆致で書き尽くされてゐます。「神様」という表現もできてきます。

商品に等価な貨幣を払う「交換」、人格の結びつきを実現するために贈り物を相手に手わたす「贈与」、見返りを一切求めない、神のみがおこなうことができる「純粹贈与」、この三つのキーワードをもとに、貴族院議員Aの不安や困惑を中沢は次のように考える。等価交換の原理の中で鮫を食べたくても食べられない仙吉に対し、Aは交換の輪とは別の贈与の輪の中に導き入れ、喜びを与えようとして、それに成功した。スマートな流儀へのこだわりから、感謝される事態を避けることも思惑どおりになつたのだが、むしろこのことが神のみに可能な純粹贈与を実現したことになり、重い感情をひきおこしたのだ、と。私が違和感を感じていた、Aがしでかしてしまつた大それた何かとは、中沢によれば、ふとしたことで実現してしまつた神の如きふるまいだつたのである。そう考えてみれば、以下の「小僧の神様」の末尾は非常に示唆的である。

作者は此処で筆を擱く事にする。実は小僧が「あの客」の本体を確かめたい要求から、番頭に番地と名前を教へて貰つて其処を尋ねて行く事を書かうと思つた。小僧は其処へ行つて見た。所が、其番地には人の住ひがなくて、小さい稲荷の祠があつた。小僧は吃驚した。——とかう云ふ風に書かうと思つた。然しさう書く事は小僧に対し少し惨酷な気がして来た。それ故作者は前の所で擱筆する事にした（十章）。

「小僧の神様」の語り手は、物語の最後に「作者」として突如現れる。そして、超越的な存在による庇護を信じかけている仙吉に、そしらぬ顔をして偶然の決着を用意することを取りやめた。「作者」がおこなったのは、超越的存在を仙吉が実体化することの回避であるが、この「作者」のふるまいはむしろ「作者」を超越的な場所におしあげることになる。結末の文章に触れるまでAの困惑に同調して読んできた読者は、結末にいたり、今度はAの困惑を入れ子型にして内に取り込んだ語り手「作者」の逡巡に遭遇するのである。超越的な場から他者の運命を左右しえる者が、思いどおりに他者を制御する際に感じる困惑と逡巡。Aの困惑と「作者」の逡巡は同系のものである。作品中には「Aの一種の淋しい変な感じは日と共に跡方なく消えて了つた」（九章）とあるが、Aと異なり、読者は末尾の「作者」が書きつけた言葉を読んで、中沢のいう純粹贈与を遂行しようとするかに見える「作者」に同調しつつ、それを不安に思うのである。

前節で「かね」の世界の仮想性を指摘したが、「小僧の神様」の世界もまた、攔筆直前における「作者」の告白によって動揺させられている。二つの小説世界の不安定性については、四節で再び検討する。

三、欲望なき貨幣へのフェティシズム

— 騙されない者はさまよう —

分析の俎上にのりにくい「かね」を論じる前提として、ここまで「小僧の神様」について考えてきたのだが、「かね」に語りにくさを感じるのは私だけではないようである。同時代の批評と後代に書かれた文庫本解説との二つを引用する。

里見弴の「金」の語り上手はますます円熟したものだと評すべきか。しかし斯うして語り上手に語られて見たところで、一体それがどうしたのかと、相手が里見弴なればこそ詰め寄つてもよからうといふもの（名取勘助「小説月評」）。

同時収録の『かね』（「改造」昭一二・一）は、できるだけ平凡に生きようとしていた男が、ふとした心の弾みから、金銭の盗みを重ねる犯罪奇譚である。内容の解説より、なぜ里見さんはこんな材料を好んで描くのか、と考える方が面白いので、ボードレールの、この人は、芸術家というよりも「人間人」であるとした画家について語った文を贈つておく（秋山駿「解説」¹⁰）。

名取も秋山も作品の核心に迫ることを放棄している。名取は批評能力の限界を作者に責任転嫁し、秋山はボードレールの引用に逃げた。本多秋五による、発表時の時代状況をふまえた「かね」の解説を読んでも、作品の核心に触れているとは考えられない。

子供るときから吃りで要領の悪い男が、地方銀行の小使になり、むら気のない人間と信用されて一五年目、五三歳のとき、銀行から託された金を着服して姿をくらまし、以後、行く先々で雇い主の金を横領逐電し、身分不相応の大金を蓄え、山陰米子の寺で、無事畳の上で六六歳の生涯を終える。誇張もお説教もなく淡々と、生い立ちから死にいたるまで細心緻密に描かれていて、戦時下の作品であるにもかかわらず、イデオロギー的なものを一切よそに優遊する作家魂をみる思いがする（本多秋五「里見弾」内「かね」¹¹）。

戦時下でありながら、イデオロギーから自由な作品という評価は正しいが、この作品から受ける奇妙な印象の説明にはなるまい。おそらく、「かね」から受ける違和感は、中沢が考えるような、人間と人間をつなぐ媒介（もちろん貨幣をふくむ）の様式やコミュニケーションの問題によって生まれていると思われる。私たちにとって他吉の行動のうち最も異質なものと見えるのは、貨幣的価値とは結びつかない何かの蒐集に子どもが熱中するかのようには、貨幣を蓄積するばかりで、そこには

近代人が例外なく抱くはずの貨幣に対する欲望が作動していない点である。貨幣に対する他吉の特異なフェティシズムを正確に説明しているのは、作品の末尾に置かれた後日譚「遺聞」における、芦屋の画家植田の言葉である。

きつと常吉にとつちア、札は、使ふための金ぢアなかつたんだ。あんな絵や字のついてる札だつたんだ。どういふわけか、……肝のせいか、虫の加減か知らないけど、その紙の札が好きで、手に入り次第、やたらにとつて置いたんだ、しまつて置いたんだ。それで、こんなに溜つたのさ。つまり、切手やペーパーなんか集めるのとおんなじで、札の蒐集なんだよ。きつとさうだつたんだと思ふぬ（「遺聞」）。

他吉は何かと交換することを夢想しないし、蓄藏の先に目的を持つこともない。彼の内向的な性格からすれば、割に合わないほどの勇気をふるってようやく実行にいたつた持ち逃げや窃盗であるが、彼はただ貨幣の蓄積をおこなうばかりで、その延長線上に欲望は動いていかないのである。この点を分析することなくして、「かね」を語つたことにはなるまい。他吉はK（京城）で貨幣を入れるための手文庫を購入し、これを生涯大事にして手元に置き続けるが、「年・明・上・前・方・浄」という呪文のような文字合わせの錠がついたこの手文庫こそ、他吉にとつての貨幣が、子どもにとつての宝物のような蒐集物として存在していたことの証左となるといえる。他吉があたえる奇妙な印象は、貨幣に対する彼の蒐集家のようなフェティシズムが、私たちの貨幣に対するフェティシズムと大きく異なることから生まれていると考えるとよいだろう。他吉の特異な貨幣へのフェティシズムを考える前提として、まずは私たちの貨幣へのフェティシズムのありかたについて確認しよう。私たちのそれは、マルクスによって適切に説明されている。

蓄財衝動は生まれつき限度のないものである。質的には、あるいはその形態からみれば貨幣は制限をもたない、つま

りどの商品にも直接に置き換わることができるがゆえに、素材的富の一般的代表者なのである。(略)貨幣の量的制限と質的無制限との矛盾のために、蓄財者はたえず蓄積というシーシュポスの労働へと追いたてられる。蓄財者は、新しい領土を獲得するたびに新しい限界にぶつかるほかはない世界征服者に似ている。

金を貨幣として、したがって蓄財の要素として固く握り締めるためには、貨幣が流通したり、購買手段として享楽手段に解消してしまうことを阻止しなければならない。だから蓄財者は自分の肉の快樂を金フェティシユのために犠牲にするのである。彼は、欲望を断念せよという福音をきまじめに実行する。(略)勤勉、節約、吝嗇は彼の基本徳目であり、多く売り少なく買うことは、彼の経済学のすべてである(カール・マルクス、翻訳Ⅱ今村仁司・三島憲一・鈴木直『資本論 経済学批判』「第一巻 資本の生産過程」「第一篇 商品と貨幣」「第三章 貨幣または商品流通」)。

引用文の後段に書かれた、享楽や肉の快樂を犠牲にした「金フェティシユ」という部分、また欲望の断念の実行という部分を読むと、貨幣を多量に死蔵する他吉との共通性を感じるかもしれないが、実はここに共通点はない。マルクスが示す「金フェティシユ」は、前段から明らか通り、シーシュポスが無限に反復する、岩を転がし上げる行為と見合ったような、また、新しい領土を獲得するたび、それをさらに拡張する欲望が動き出す征服者のような、飽くなき欲望に衝き動かされた、素材的富の一般的代表者Ⅱ貨幣としての金を無限に所有しようとするフェティシズムである。これが私たちの貨幣へのフェティシズムの実態であろう。

他吉の欲望の異質性の根拠は、作品中に明記されている。

他吉には、母親の記憶は一つもない。何人か、兄や姉として生れた者どもが、悉く夭折したのに、一旦道端に捨て置き、誰かに頼んで拾はせ、更めてその人から貰ひうける形にすれば育つ、と聞いて、そのやうにし、名にも「他」の字

を入れたところ、今度は子供が育つて、その代り母親を奪られた、——かう云つて聞かせたのは父親だ。幼ごころにも、「その代り」といふ言葉が響いて、どんなものか味は知らないが、うちに母親のゐないのは、自分のせむだ、そのため、父親に憎まれても仕方がない、——こんな情ない気持ちをもつた。が、父親は、よそのことは知らず、安心してたよりきれるたつた一人の相手だし、自分が死んで、母親が生きてゐた方がよかつた、と、別段さうも思つてはゐない様子だつた（冒頭）。

床の上から、我儘を云ひ云ひ、三年保つて、七十一歳の初夏の頃、遂に父親が死んだ。その前の日には、たいへん気分がいゝと言つて、他吉にすっかり体を拭かせたあと、そこらの片づくのを待つて、側近く坐らせ、こんなことを云ひだした、——俺もずるぶん永いこと生きて来たが、考へてみると、これと云つて、何も仕出かしたこともなく、心残り、は、たゞそれ一つだ。（略）男と生れて、一生涯、何一つ仕出かしたといふ覚えもなく、かうして死んで行くのは、やつぱり寂しい気のするものだ。そんなら俺は、一体どんなことをして置けばよかつたのか、——こないだ（傍点は原文）から、いろ／＼考へてみたけれど、これと言つて、思ひあたるものもなかつた。だから、なほさらお前に、こんな風にしてみる、あんなことをやつてみると、さういふ註文は出せないのだが、然し、一生の間に、何かひと仕事し残さなくては駄目だ。死ぬ前に、あゝ、俺も、あれだけのことをしたんだから、と思へば、ほんとに、にっこり笑つて死ぬる（一章）。

母親の命を奪い他吉が生まれたのだと伝える父親の言い分を、父親の他吉に対する憎悪とともにすんなり受け入れてしまつた他吉に、母親への強い愛着と父親への強い憎悪を前提とするエディプス・コンプレックスが成立する可能性はほとんどない。父親は他吉を威嚇する必要もなかつたから、父親と他吉のあいだに葛藤が生まれることもない。欲望を駆動するため

の、この世の象徴的秩序にみずからを参与させるための前提となるコンプレックスの不成立。他吉にゆるされるのは、欲望に駆動されることもなく、世界の象徴的秩序に組み込まれていくこともなく、他者の輪郭や重ささえもわからないまま生きていくことであろう。

福原泰平はラカンが考える欲望について、次のようにまとめている（『現代思想の冒険者たち ラカン——鏡像段階¹⁴』）。

（略）あえて欲望というものを明確化するとすれば、先に疎外の式で示したような知と存在との乖離の中で、両者の裂け目をつなぐ引力として、欲望を考えることができるのではなからうか。このように、欲望とは去勢において決定的な何ものかが失われたのだという声を聴いた主体が、欠けたものを取り戻すべくそこへ向かおうとする力としてある。よって、欲望が生じる基盤には空無の広がりがあり、そこから有を回復しようとする不可能な再建への試みとしてこれがあるということができるのである（『第五章 欲望と主体の運命』「5 欲望」）。

欲望の次元とは常に無いものを可能性のうちに与えるといった間接的な充足のレベルのことであり、欲望が達成されるには（略）幻覚的な過程を経ることになる。言い換えれば、欲望の次元とは常に無なるものと密接に関係しており、欲望のもつ現実とは現実にはすでに失われた後の、心的に欠けたものの現実のことなのである（同右）。

真に欲望に駆動されることがない他吉に向かい、人生における大きな欲望の実現を提案したのが、臨終間近の父親であったことは大きな皮肉であるが、かつて他吉の欲望を生殺しにした本人の提案が、他吉の欲望のありかたを大きく変えることはなかった。福原が説明する通り、欲望が生じる不可欠な基盤は空無であり、決定的な喪失である。欲望が「有」として存在するためには、決定的な「無」を手にしなくてはならない。乖離・裂け目の彼岸に向けた想像的なベクトルが欲望である。

「有」を獲得せよという、他吉の父親の遺言が他吉にどう働きかけたかを考えることは残酷な興味を呼ぶ。遺言は他吉に犯罪をとまなう多量な貨幣蒐集をさせることになり、これが他吉のライフワークとなったのは確かである。しかし、重要なことはこのライフワークには欲望がともなっていないことだ。他吉にとつて真に必要なものは、人生の目標の提示という「有」ではなく、貨幣に対する私たちのフェティシズムのような、あるいは、媒介物に刺激され続ける私たちの性欲のような、そのような欲望を始動させるための「無」だったといえるだろう。

父親が、他吉の欲望のありかたと深く関わりをもっていたことは確かである。父親が脳卒中で倒れた知らせを受け、郷里に戻った晩に、他吉の性欲は突然昂揚した。

ふいに他吉は情欲を感じた、——はつきり看護婦を対象としての情欲で、だしぬけに飛びかかつて、組み伏せてやろう、といふやうな凶暴なものだった（一章）。

結局この看護婦に対する凶暴な衝動は果たされないで終わるが、「かね」全編を通して他吉の欲望が最も昂揚したのはこの時点である。父の死という局面に遭遇した時、他吉は欲望を生じさせるための「空無」を手に入れる可能性を手にしたのだといえる。この後、他吉は三年間にわたって父親の面倒を見ながら、父の仕事を継いで働く日々を送る。先に引用した父親の遺言は、むしろ他吉の欲望に最後のふたをしたと考えられる。他吉は父親の言葉によって、ダイナミックな行動をこころぎすようになるが、駆動される欲望を内的に感じられない他吉にとつて、欲望の実現は外的な指標ではかりうるものでなくてはならず、彼は数値化する貨幣の蒐集をはじめたのだということができよう。また、他吉の性のフェティッシュは腰巻きであるが、これもまた数値化する蒐集対象であることは偶然ではあるまい。彼にとつての腰巻きは、彼の好物の大福以上の意味を帯びていない。さらにいえば、他吉が食べきれないほど大福を買いこむところからも、彼の欲望が数値化

できる外的な指標に依拠したものであることがわかる。

貨幣論とラカンの思想との接点に思考を移そう。中野昌宏の『貨幣と精神——生成する構造の謎——』¹⁵から、ラカンの思考に基づいた貨幣についての言及を二箇所引用する。

(略) われわれが貨幣と呼んでいるものは、一言で言うならばわれわれにとって「商品でありながら商品以上のものを含んだ何か」である。消費し満足しそれで終わり、のではなく(そもそも貨幣それ自体は消費できない)、それを欲望すること自体をわれわれが愉しんで(「享樂」(jouissance)して)しまうような、転倒的なものである(「第一部 貨幣」「第三章 マルクスと貨幣」)。

貨幣とはわれわれの(傍点は原文)幻想を構成する特別な商品であると言える。しかもやはりわれわれはそれと知っていてすらこの幻想に騙され続けたいわけにはいかない(同右)。

他吉の蒐集対象としての貨幣が、欲望が駆動していないにもかかわらず量的には豊かであったのと対照的に、私たちのフエティシズムの対象としての貨幣は、大いに欲望を駆動するにもかかわらず、それ自体を消費できない、いわば実体性を欠いたものである。消費対象でありながら消費できず、消費欲望自体の享樂をうながし、その喚起する幻想によって私たちが騙し続けるものこそ、私たちの欲望する貨幣なのである。私たちはこのように実体が空虚な貨幣に騙されうることで、欲望を作動させ、この世界に参入する。中野が説明するとおり、私たちにとつての貨幣はあまりに「転倒的なもの」であり、「転倒的な」世界を生きるのが私たちなのである。他吉の多量な貨幣(と腰巻き)を蒐集する長距離にわたる旅こそ、ラカンの言葉「騙されない者はさまよう」¹⁶好個の例であろう。他吉は「転倒した」世界の中で幻想を生きることができないため、遠

くまでさまよい、貨幣蓄蔵を無目的に重ねていたのだ。

四、自意識なき純粹贈与の可能性

——媒介形式の問い直しの時代に——

さて、他吉の貨幣に対する欲望のありかたは、時代の中でどのような位相を見せるだろうか。「かね」が書かれた時代に論を移し、考えてみよう。

今村仁司は、人間が関係主義的な存在であることをふまえ、そこに人間にとっての貨幣の必然性を見ている（『貨幣とは何だろうか』^①）。

主体と客体のあいだに距離が生まれるとき、そこにはすでに貨幣の形成の可能性がかすかに成立している。なぜなら、距離が生ずれば、その距離を埋めて橋を架ける必要があり、その架橋の仕事を「媒介」と呼ぶならば、貨幣こそこの媒介形式の最大のものであるからである。してみると、距離化と媒介は、同一の事態の別の側面であるといえるだろう（第二章 関係の結晶化）。

人間にとって必然的な媒介としての貨幣が、人間が生きる時代と深く関わるのは当然であろう。今村は、フランス革命の時期に見て取れる近代第一期の終焉と近代第二期への危機的移行について、次のように説明している。

（略）「関係づけの基礎」あるいは関係の媒体を彼らは問いなおす。危機の時代あるいは移行の時代には、自明性へ

の問い（傍点は原文）が過激なまでに登場する。思考の媒体としての言語への問い、文学の媒体としての言語（生きた言語）への問い、交換の媒体としての貨幣への問い、これらが同時に集中的に現れる（「第五章 文字と貨幣」）。

そして、ほぼ同じようにして、近代第二期の終焉と次の時期への危機的移行が、フランス革命後百五十年から二百年を経た二十世紀の前半に起こったと語る。

マラルメとジッドが文学言語と文学の本質を媒体にそくして問う。哲学者たちが言語と記号を問うことで、哲学の純粹本質を再考する。画家たちが絵画の本来的なあり方を求めて模索し、経済学者たちがまたもや貨幣なるものに苦悩し、貨幣の本質への問いへと連れもどされる。現象学運動、抽象絵画、純粹文学、純粹詩、通貨管理論、計画経済論、これらの一見無関係にみえる運動や議論は、基礎への問い（直し）を共有していて、時代の共通圏のなかに根をはっている。基礎の問いは、関係の媒介形式への問いである。あらゆる領域で媒介が、貨幣形式が、問いなおされたのである。それは現在でも生きている問いである（「第五章 文字と貨幣」）。

あらゆる領域における媒介の形式が問いなおされるようになったと今村が指摘する二十世紀前半において、媒介としての貨幣をめぐる問い直しの例と、文学をめぐる問い直しの例を見よう。里見の「かね」は、貨幣の問い直しと文学の問い直しが交差する場所から生まれていると考えられるのである。

佐伯啓思は『貨幣・欲望・資本主義¹⁸⁾』の中で、ケインズの「クリソルド¹⁹⁾」と「我が孫たちの経済的可能性²⁰⁾」をふまえて、一九三〇年（日本の元号表記でいえば、昭和五年）前後の「貨幣愛」の問題点を次のように説明している。

(略)「普通の人々」は、自らの生を生き生きと描き出すことができず、常に不安に駆られ、絶え間なく動き回らなければ済まなくなる。絶えず動き回り、何かを追い求めることによって、自らの生の空虚を埋める価値の代理を探し回るのである。

そこで「貨幣愛」がその絶好の動機を与えてくれる。それは、ただモノを買うために必要な貨幣ではなく、財産もしくは資産として保有する貨幣であり、しかもその財産は土地のようにただそこに横たわつてある存在ではなく、その価値を絶えず雪だるまのように膨張させる使命を帯びた貨幣なのである。その意味での貨幣愛は、ケインズによると「いまましい病的なものとして、震えおののきながら精神病の専門家にゆだねられるような半ば犯罪的で半ば病理的な性癖の一つ」(「我が孫たちの経済的可能性」)に他ならない。(略)神を見失い、「伝統的な社会の土壌や習慣」から切り離されて生活の「根」を失った「豊かな現代人」、彼らを襲うのは、その存在に対する不安であり、その不安と表裏一体となつた退屈であり、その結果彼らは、ほとんど投機的に貨幣を追い求めることによってこの精神の不安から逃れようとする(「第八章 『過剰』と『退屈』のグローバル資本主義」)。

前章までで見えてきた、私たちの貨幣へのフェティシズムが、「豊かな」時代を退屈に生きる現代人の中で、さらに過剰になつてきたことがわかる。他吉と異なり、空虚とともにある現代人は、大きな空虚ゆえに導き入れた大きな欲望を、貨幣を媒介にして偏執狂的に手に入れようとしはじめる。一九三〇年前後における、加速する不安に比例する欲望、加速する欲望に比例する貨幣への執着のありようが指摘されている。佐伯が依拠するケインズの「我が孫たちの経済的可能性」が書かれた一九三〇年には、すでに世界恐慌が始まつているから、ケインズの指摘する強化された貨幣愛のありかたは、外国の好況を背景とした主張ではないことが理解されよう。エスカレートする貨幣への欲望は、日本においても同様だとみてよいだろう。⁽²⁾

続いて、文学について考えてみよう。媒介としての文学をめぐる問い直しの例を日本で求めるならば、横光利一の「純粹小説論」を端緒とする、いわゆる純粹小説論争が適しているだろう。⁽²³⁾ 川端康成「『純粹小説論』の反響」によれば、「純粹小説論」発表の翌月に二〇本もの反響が寄せられていることがわかる。川端も指摘していることだが、純粹小説論争の最大の焦点の一つは、自意識の問題だった。横光の議論のうち、自意識をめぐる部分を引用しよう。

(略)ここに、近代小説にとつては、ただそればかりでは赦されぬ面倒な怪物が、新しく発見せられて来たのである。その怪物は現実に加えて、着々有力な事実となり、今までの心理を崩し、^{モラル}道徳を崩し、理智を破り、感情を歪め、しかもそれらの混乱が新しい現実となつて世間を動かして来た。それは自意識といふ不安な精神だ。この「自分を見る自分」といふ新しい存在物としての人称が生じてからは、すでに役に立たなくなつた古いリアリズムでは、一層役に立たなくなつて来たのは、云ふまでもないことだが、不便はそれのみにあらずして、この人々の内面を支配してゐる強力な自意識の表現の場合に、幾らかでも真実に近づけてリアリティを与へようとするなら、作家はも早や、いかなる方法かで、自身の操作に適合した四人称の発明工夫をしない限り、表現の方法はないのである。

横光が提起した自意識の問題に対する数少ない返答として、川端は、勝本清一郎「純粹小説とは？」⁽²⁵⁾を取り上げ、詳しく分析しているが、勝本は、横光が「四人称」という不明確な用語でおこなつた主張を、人称と語りの複合化の問題に要約できると断じた。近代になつて新しく発見された、心理・道徳・理智・感情をゆがませる怪物と横光が信じる自意識の問題であれ、人称と語り手の複雑化・複合化の問題であれ、その焦点はいずれもまさに媒介としての文学を問い直すところにある。里見弴の「かね」は、媒介としての文学が本格的に問い直される時代の中で生まれた小説である。二節の最後で、「かね」「小僧の神様」の小説世界の不安定性を指摘したが、「かね」の不安定性は文学というメディアが根本的に見直される渦中

で生み出された揺らぎといえるだろう。しかし、これまで見てきた通り、「かね」の大きな特徴の一つは他吉の欲望の不在であり、自意識の希薄さであった。欲望の起動しない他吉の内面は淡泊にしか語られず、自意識の問題を大きく離れている。「かね」は反時代的な小説であり、他吉は反時代的人間であるといえるだろう。

ここで思い起こしたいのは、志賀直哉「小僧の神様」における貴族院議員Aの自意識である。Aは自意識を扱いかねて、偶然に純粹贈与を実現してしまい、かえって重い心情に悩まされたのである。純粹小説論争が起こる十五年前に発表された「小僧の神様」こそむしろ、自意識を射程にした純粹小説論の時代にふさわしい小説といえるだろう。「小僧の神様」の小説世界の不安定性は、まさに自意識を契機にしてもたらされていたのだ。「小僧の神様」に実現した自意識を契機とした純粹贈与、これと対照的な結末を迎えたのが、他吉であった。何を買うあてもないまま手元に貨幣を蒐集した他吉は死期を悟り、二万円を超える大金を贈与するべき相手を病床で考える。交換・贈与・純粹贈与いずれにおいてもほぼ無縁に、そのかわり六回の大量貨幣奪取を生き甲斐として、他吉は生涯を生きてきたが、死期を目の前にした彼に贈与・純粹贈与の好機が訪れたのだ。

さア／＼、安閑とはしてゐられないぞ。なんとか札の始末をつけて了はなければ……。どうせ要らないもんだ、誰かにやつて了はう。誰がいゝかな。さア、だアレもゐないな。さて、やらうといふ段になつて考へてみると、まつたく、ゐないな。……ゐない、一人もゐない。(略)——さア、忙しくなつて来たぞ。だん／＼忙しくなつて来たぞ。札の始末だ、札始末だ。——死んだあと、もう一度また、みんなを吃驚させてやれるな。それには朱い匣の錠前をはずして置いてやらなくつちア……。 (三章)。

(略)——なアに、これ、おぢいちゃん。——綺麗だらう？ 赤くつて。——がくん、と頷き返した。——それをね、

——くるりと向けてよこした顔を、ぢつと見据えたまゝ、——それを、お前、おぢいさんの形見に、貰つてくれないか。
——云ひ終るか終らないうちに、千代子は、ぴよい、と飛んで立ち、——かアいろ。——あゝ、これく、ちよつとお待ち。……いゝぢアないか、こんな綺麗な赤い匣……。——いやだよ。そんなもん、おうちんだつてあるわよ。——それアあるだらうけどさ、千代ちゃんのぢやないだらう？ だから、それを、その赤い匣を……。——もうその時には、土間へずりおりて、こつちを向いたまゝ、草履を爪つま索さくりながら、——いやだべえーだ。なんだ、おぢいちゃんのおすけべ（傍点は原文）！——あけツばなしのまゝ、ぺたくと駆けだして行つて了つた（三章）。

相手にわたす行為としては、他吉の贈与は失敗した。しかし、他吉の贈与の企図は非常に純粹に見えるのも事実である。中沢が「小僧の神様」について書いた「近代社会の中でおこなわれる『贈与』の難しさ、不可能性などが、さらりとした筆致で書き尽くされています」という評価は、むしろ里見の「かね」についてのものとした方がふさわしい。

「小僧の神様」は、貨幣のレベル（中沢のいう交換のレベル）を超越した人間の善意と自意識に基づいた、時代に先行したともいえる物語だったが、「かね」は、貨幣への欲望さえ駆動されず、善意や自意識に浸透されない内面を生きた人間の物語であった。欲望を引き抜かれたかたちの他吉は、時代の中でエスカレートしていく自意識への関心と貨幣への執着に対し、遠く離れたまま生き抜いた。「かね」は、媒介によつて欲望が強化され、また媒介自体への欲望が強化される近代において、欲望と媒介のシステムから脱落した者の、しかし、システムに囚われずに生ききってしまった一代記といえるだろう。

注

- (1) 一九三七(昭和一二)年一月に『改造』に発表された際にはタイトルは「金(かね)」であり、同年六月の初収単行本『アマカラ世界』(中央公論社)でもタイトルは変わらず「金(かね)」だったが、戦後、単行本『かね』(一九四八「昭和二三」)年二月、丹頂書房)に収録する際、作品名も「かね」と、漢字から平仮名に改められた。この「かね」版の本文を基本的には底本とした(さらなる字句の修正等はある)『里見淳全集 第七巻』(一九七八「昭和五三」)年六月、筑摩書房)「かね」が定稿だといえる。しかし、本稿においては、便宜を考え作品タイトルを「かね」とするが、同時代との接点を研究の一環としていたため、初出の『改造』版本文をテキストとする。なお、初出・初収までは「志賀直哉兄に贈る」の献辞があつたが、「かね」になつてからは消えている。
- (2) 地名以外の改稿は、字句の訂正程度にとどまつている。また、「里見淳全集 第七巻」版では、「かね」版本文からさらに若干の字句の訂正がほどこされているが、地名表記の変更は見当たらないので、本稿ではとくに四稿としてあつかわないことにする。
- (3) 犯罪直後の生活において、同じ名前を名乗ることがあり得ないことからすれば、変名が示されていない、芹屋(A)の犯罪後の名古屋(N)で暮らした時期と、名古屋(N)の犯罪後の麻布で暮らした時期にも変名を使つていたと考えるのが自然だろう。名前に關していえば、さらに「他吉」という主人公名自体に留意する必要がある。語り手が焦点化してその内面を語つていく主人公の名前に他者が刻印されていることは、この小説世界の奇妙な実体感の欠如と強く結びついている。
- (4) 『住友銀行百年史』(一九九八「平成一〇」)年八月、住友銀行)による。
- (5) 初出は、『白樺』一九二〇(大正九)年一月。
- (6) 二〇〇三(平成一五)年一月、講談社。
- (7) 引用は、『志賀直哉全集 第三巻』(一九七三「昭和四八」)年九月、岩波書店)による。
- (8) 中沢の「交換」「贈与」「純粹贈与」の着想は、ジャック・ラカン、マルセル・モース、ジャック・デリダらの思考をもとにしている。また、「小僧の神様」を中沢とほぼ同じ枠組みで検討した論文に、斉藤努「廃棄される純粹贈与——志賀直哉『小僧の神様』——」(『龍谷大学大学院研究紀要——人文学——』第二〇集、一九九九「平成一一」)年一月)があるが、その主張は交差しながらも、異なつている。
- (9) 『新潮』一九三七(昭和一二)年二月。
- (10) 里見淳『極楽とんぼ』一九九三(平成五)年二月、岩波文庫。
- (11) 『増補改訂 新潮日本文学辞典』一九八八(昭和六三)年一月、新潮社。
- (12) ギャラリー鍵と錠を主宰する加藤順一氏を訪れ、漢字文字合わせ錠については以下の話をうかがつた。一、漢字の文字合わせ錠は中国や朝鮮半島に実際にあること。二、正しい並べ方が意味をもつた句を構成することは、錠の果たすべき機能から考えても、非常に考えにくいこと。三、六文字におよぶ漢字の文字合わせ錠は今までにほとんど見たことがないこと。したがって、「年・明・上・前・方・浄」の文字合わせ錠は虚構であり、この六文字は一つの意味をもっていない可能性が高い。
- (13) 『マルクス・コレクションIV 資本論 第一巻(上)』二〇〇五(平成一七)年一月、筑摩書房。
- (14) 二〇〇五(平成一七)年四月、講談社。
- (15) 二〇〇六(平成一八)年三月、ナカニシヤ出版。中野昌宏は中沢とラカンの結びつきを説明するが、その際、中沢の「小僧の神様」解釈にも言及している(『第二部 精神』「第7章 聖なるものと構造」)。
- (16) 中野昌宏の引用にしたがう(『貨幣と精神』「第二部 精神」「第6章 超越論と脱構築」)。
- (17) 一九九四(平成六)年九月、ちくま新書。
- (18) 二〇〇〇(平成一二)年二月、新書館。
- (19) 『ネーション・アンド・アシニアム』一九二七年一月二二日。

- (20) 『ネーション・アンド・アシニウム』一九三〇年一月一日、一八日。
- (21) あくまで傍証としてであるが、里見の「かね」(初出では「金」)が発表された一九三七(昭和一二)年一月の(一日付)『東京朝日新聞』の一面広告欄最上段には、有斐閣から出版された四冊の貨幣関連書籍の広告が掲載されている。山崎覚次郎『貨幣瑣話』(一九三六「昭和一一」年一月)、荒木光太郎『貨幣概論』(一九三六「昭和一一」年二月)、岡橋保『貨幣本質の諸問題』(一九三六「昭和一一」年一月)、松岡孝児『金問題研究』(一九三三「昭和八」年二月)の四冊である。
- (22) 『改造』一九三五(昭和一〇)年四月。引用は、『定本横光利一全集 第十三卷』(一九八二「昭和五七」年七月、河出書房新社)による。
- (23) 純粹小説論の問題系は、今村の指摘するジツドの文学論と深く結びついている。
- (24) 『新潮』一九三五(昭和一〇)年七月。
- (25) 『三田文学』一九三五(昭和一〇)年五月。

〔付記〕

1. 引用本文において、旧漢字はすべて新漢字に改めた。
2. 加藤順一さんには、初めてお訪ねしたにもかかわらず、貴重なコレクションを多く拝見させていただき、貴重なお話をいくつも聞かせていただいた。ここに深く謝意を申し上げます。
3. 里見淳「かね」の魅力は、本年度四年ゼミ生、塚本瑞生・萩田彩二人の研究発表によって知ることができた。ここに謝意を記しておく。